

高校生を撮る (写真家・小野啓)

▼東京教室 第21期
濱田沙季

8年間に渡り、北海道から沖縄まで400人以上の高校生のポートレートを撮り続けてきた写真家、小野啓。真直ぐに被写体と向き合う姿に迫った。



偶然のタイミング

私が初めて、小野啓さんの作品に出会ったのは、駅前の本屋。『桐島、部活やめるってよ』(集英社・朝井リョウ)の装丁写真だった。表紙のどこか物憂げな男子高校生の姿に不思議と惹かれるものがあった。レジへと迷うことなく向かった。小説は、高校を舞台にした青春小説で、バレー部のキャプテン桐島君が部活をやめたことをきっかけに起こる出来事をオムニバス形式に構成したものだ。小説の内容と同時に気になったのが、章ごとに入る高校生の写真。かつて高校生だった人たちに、きつと共通するであろう記憶の断片のような風景は、作品の世界と見事に調和していた。

「これ、面白かったよ。良かったら読んでみよう」

高校3年生になる妹に、何気なく小説をすすめた。返ってきたのは、信じられない一言だった。

「私さ、明日この本の写真撮った人と会おうよね。よかったらお姉ちゃん一緒に行かん？」

2010年3月某日。高知県高知市。やや曇り。大阪での撮影の仕事を終え、夜行バスで高知入りした小野さんを迎える。黒縁のメガネをかけた優しいような男性だ。

「写真を撮るのに、どこかいい場所はありませんか？」

小野啓33歳。写真家。2002年から8年間、北海道から沖縄まで、実に400人以上の高校生連達のポートレートを撮り続けてきた。

聞けば妹は、半年ほど前に雑誌の特集で彼の写真を見て、その活動に興味を持ったのだという。美術部と写真部に所属し、自身で作品も作っている彼女は、公式ホームページから小野さんに感想のメールを送った。そこのやりとりを通じて、今回、私たち姉妹の地元である、高知県で高校生の写真を撮るに至ったのだそうだ。本当に偶然のタイミングだった。

「撮影場所は、被写体の高校生と一緒に探していくようにしているんです」と小野さんは言う。路面電車が走る道路沿いを南へ歩いて、街の中央部を流れる鏡川の河川敷へ。今回の撮影では、

新しい発見でした

妹が、自分の友人4人に撮影への協力をお願いした。県内の女子高に通う妹の幼馴染、Aさんと合流。最初の被写体になってもらう。

「写真を撮る時は、少し離れた場所に居てもらえますか」

妹と2人、遠くからこっそり様子を伺う。小野さんは、自身の処女写真集である『青い光』(青幻舎)のページをめくりながら、Aさんに、自分が撮っている写真の雰囲気伝えていく。少しずつポーズを変えながら、撮影は5分程で終了。最初に会った時は、緊張していた表情のAさんの顔が、撮影を終えて少しほぐれたように感じた。

電車や、自転車で高知市内から、隣の南国市へ移動し、田んぼ道や資材置き場の前で妹を含む5人の撮影を行った。撮影は、昼過ぎから、日が落ちる17時前に終了。後日、撮って貰った写真を受け取った高校生たちに話を聞いてみた。

「写真を撮る時って、普通笑うじゃないですか？けど自然のまま、笑わない表情でいて欲しいって小野さんに言われて、笑わないのって、なんか逆に難しかった」

高校生を撮る

2010年8月、渋谷。再び小野さんに会い、話を伺った。Mさんの写真に対する感想を告げる。

「そういう風に思ってたんだ。なんか、嬉しいですね」

彼は現在、フリーの写真家として、東京を中心に活動している。

「写真を撮りたいっていう思いは、高校を卒業するくらいから持っていたんですが、大学に入ってからちゃんと写

真を勉強したいという思いが強くなって、卒業してからすぐ写真の専門学校に行きました」

立命館大学の経済学部を2001年に卒業後、大阪にあるビジュアルアーツ専門学校の写真学科に進んだ。

「学校では、街の雑踏を歩いて、路上スナップを撮っていくような課題に取り組んでいたのですが、それが自分に合っているとは思えなかったんです。正直に、自分がやりたいことをやったり方がいいと感じて、かねてから撮りたいと考えていた『高校生』を、撮ることに決めました」

何故、高校生なんですか？

この問いに彼は、よく聞かれるんですけど、それが一番難しいんですよね、と前置いた。

「何というか、最初から撮りたかったんです。元々、ポートレートを撮りたいなとは思っていたんですよ。自分にとって、人間の中で一番カッコいいなって思う対象が、高校生なんです。まだ完成していない部分というか、そういうのを見るだけでも面白いなと思ってたし、うまく説明できないんですけど、何か惹かれるものがあったんですよ。それと、その世代の人たちと接点がなかったので、彼女らがどんなことを考えて生きているのか知りたいという思いもありました」

専門学校で2年間学んだのち、滋賀県内の大学の職員として勤務しながら、休みの日に作品を撮る生活を始めた。当初は、教師をしている知人などを一つに、高校生の被写体を探していたが仕事の多忙さから、自分で被写体を探すことが難しくなっていた。そこで、写真を撮らせてくれる高校生の募集をすることを思いつく。

●モデル募集中!

写真を撮らせていただける「高校生」を募集しています。

*男女、学年は問いません。

*被写体になってくれた方には、お礼



keep_on_dancing_leon

にプリントを差し上げます。
興味のある方はメールでお気軽にご連絡ください。

こんな文面を記載したチラシを刷り、高校生の集まるショップに置いてもらい、雑誌の募集欄で写真を撮らせてくれる高校生を探した。
「被写体の募集は、戦略的に始めたものではなくて、どうやったら、作品を撮り続けられるんだろうか、と思っ
て、苦しみから生まれた方法なんです
よね。本当にそうするしかなかった
んです」

向かい合う

徐々に、高校生からメールが届き始めた。「モデルになりたい」「面白そう」「記念を残したい」。彼女たちが撮りたい理由は様々だった。日程と場所を打ち合わせて、北海道から沖縄まで、メールをくれた高校生たちに自分から会いに行った。被写体の高校生を事前に選ぶことはなく、会うまで顔も見たことがない場合がほとんどだったという。もちろん交通費などは全て自腹だ。そうして撮影した高校生の数は、8年間でおよそ400人にもものぼった。ちなみに、過去に撮影をすっぽかされたことは、ほぼない。
「色んな子がいるんですけど、最初の

扱いされてしまうんですけどね」背景には、メディアで取り沙汰される事件の影響が大きいように思うと言う。
「たとえば、最近だと、女子高中生にモデルになって欲しいって言って、無理やりホテルに連れ込んだりする事件とか。写真を撮ってる人、皆が皆、そういう風なイメージで見えてしまっているんじゃないかな。写真を撮る気軽に撮りにくい時代になっているように思うんですよね」

今回の高知での撮影は、当初、県内の高校を撮影場所にしたと学校側に申請を出していた。

しかし、高校側からの答えはNG。「何かあった時、責任が持てない」という理由からだ。数年前に起きた小学校での児童殺傷事件や、相次ぐ子どもをターゲットにした犯罪を受けて学校や社会全体が過敏になっているのは事実だ。教師が知り合いの場合などには、こっそり撮影を許可してもらえないこともあるが、対学校の問題になってしまつと、職員会議で駄目になってしまう場合がほとんどだという。

そうした事例や、被写体が未成年であることも踏まえ、写真を発表する際は、細心の注意が払われる。

「写真を撮った後も、高校生たちとは、連絡を取れるようにしています。特に、どこかで発表したりする場合は必ず許可を取っています。勝手に載せる人も

理由は何であれ、自分を見てほしいっていう思いは、みんなに共通している気がしますね」

小野さんは、そうした高校生たちと、何より「向き合うこと」を大事にしたいと強調する。

「僕がちゃんと向き合うのは当たり前のことなんですけど、相手に対しても、向き合っ
て欲しいと思っ
ています。最近の子
って、人とちゃんと向き合
ない感じがするんです。なんとなく友達と付き合っ
て、うまく装っ
て、優等生を演じるのがす
ごくうまい。器用
だけど、一人になっ
て、はい、意見言
って欲しいって
言うのと、結構言
えないかな」

撮影する際、彼は、ちよつとしたポーズの指定や、「自然に」「笑わないで」という指示以外はあまりしない。余計な演出をすることなく、レンズを通して彼らのパーソナリティに踏み込もうと試みる。教室、公園、駅のホーム、街角……、ありとあらゆる場所で撮影された高校生たちの視線は、カメラを覗みつけるように鋭く光る。「制服」が芸術作品の中で用いられる場合、それは学生を表す記号的なモチーフになってしまいがちだ。しかし、彼が撮る高校生たちには、その記号的な「制服姿の高校生」という表現を超える力がある。それは何故か？ 個々の高校生の視線に強

いるんですけど、そこはきちんとしないといけない部分だと思っ
ているし、こ
の子たちを守る
ていうのが、撮
った側の責任だ
と思う。そうい
った所をちゃん
としないから、
色々怪しいと
か言われるん
だと思っ
ています。相手
手をリスペク
トして向き合
えば、もっと撮
りやすいのに」

「青」から「群青へ」

今年11月から、実に4年ぶりとなる個展「群青」が、東京と大阪で順次開催される。展示される作品は、全て新作だ。

「個展のタイトルである『群青』には、青よりも濃い、青が集まったものなどの意味があります。だけど、『群青』についてはまだ何とも言えないです。本当の意味は、これから見えてくると思っています」

ずっと、この先、高校生を撮り続けるかどうか？ の問いには、「まだわからない」との答えが返ってきた。



aoikabeno_mukou ni..

個性があるからだ。媚びることも、怯むこともないその視線の先には、レンズを介して真剣に対峙しようとする小野さんの存在がある。

青い光

2006年、全国を飛び回って撮影した高校生のポートレートを集めた作品が、第4回ビジュアルアートツフトアワードで大賞を受賞。プライズとして、写真集「青い光」が上梓された。写真集の中には、60人の高校生の姿が掲載されている。タイトルである「青い光」には、「青春の光」と「ナイフが青くきらめく」という明暗2つの意味が込められた。メールのやりとりから始まった出会いであることから、作品のキャプションには、メールアドレスの@以前の部分をイメージしたものを、新たに被写体の高校生本人に考えてもらった。

「現代のID的な要素を孕んだ、個性が出る部分だと感じたんです」と小野さんは語る。

「高校生」は、目に見えない檻の中にいるような存在であるように思う。近年、メディアで過剰に報道される少年犯罪や、いじめの問題など、「何を考えているのかわからない」「こわい」というようなイメージを世間から抱かれている部分がある。当の高校生たち

に至っても、ほとんど大人と近い考え

方、行動ができるにも関わらず、学校や家庭という極めて狭いコミュニティの中で、生活していることで、社会全体は見えていないし、そのコミュニティから飛び出していくことはほとんどない。小野さんは、自身と高校生の間にあるカメラが、免許符のような役割をしていると言う。高校生と世間の間にある檻のスキマに彼は、カメラと共にすんなりと入りこんでしまふのだ。「高校生の方から、切実な身の上話を打ち明けられるときもあります。『私、リストカットしてるんです』とか。だけど、僕が自分からそういう話を聞き出したりはしないんです」

彼は、無理にコミュニケーションを取ろうとしたり、たとえて言うならリストカットをしている腕を捲らせて写真を撮るようなこともしない。両者は、しつかりと向き合いながらも、絶妙な距離感を保っている。

この子たちを守る

しかし、高校生を被写体に選んだことで、周囲からの厳しい目もあるのは事実だ。

「撮影中に職務質問されたことは、何回もあります。『大丈夫なのか君たち？』って（苦笑）。悲しくなるね。そういうことがあると。悲しい。変態

自分の存在を見つけてほしい

「写真を残すことで、自分を保ちたい。普段は不安定で、誰にも認めてもらえないから、写真を撮ってもらって、それを大事にしたいって子もいました。そういう子がいるって思うと、写真を撮っていきたくて思うし、撮る意味もある気がします」

写真を撮る意味について、小野さんは、そう語った。
「いつだって自分の存在を見つけてほしいと願う若者はいる——。」

写真集「青い光」の帯には、そんな言葉が記されている。高校生活という短い期間の、シャッターが押された、ほんの一瞬。写真の中で永遠に高校生であり続ける彼、彼女は、流れゆく時代の中における自分の「存在」を問いつづけるのだ。

おのけい

写真家。1977年東京都生まれ。2001年立命館大学経済学部卒業。2003年ビジュアルアート専門学校・大阪写真学科卒業。同年、富士フイルム新人賞奨励賞受賞。2006年に、第26回写真ひとつぼ展「入選」第4回ビジュアルアートフットアワード大賞を受賞。写真集に「青い光（青い光）。2010年11月9日（火）11月22日（月）新宿ニコンサロンにて、写真展「群青」が開催決定。2011年1月には、大阪ニコンサロンでのアンコール展も予定されている。

写真を撮らせて頂ける高校生を募集しています。公式HP
http://www.onokei.jp